

日蓮聖人の臨終観

奥野本洋

私たちは、この世に生を受け、諸事に励み、ある人は仕事を成し遂げ、又ある者は心残りのまま、この世を去っていく。「人びとがいかに生き、いかに死んだか」という問題は、人間本来のものであって、究極の問題である。我々はいつ死ぬかわからないのにその事を忘れ、他人事のように思つて暮している。人間の眞の生きがい、この世に生を受けた意義を考える時、臨終のことと切り離しては考えられぬであろう。平生からの心の準備があつて、どうすれば「よく生きる」ことができるかを考えて、人間性を高めていかねばならない。死を見つめることは恐ろしいことかもしれないが、それから逃避することはできない。いづれ直面せねばならぬ問題である。そしてそのような立場に立たされた者程、生命の不思議をはっきりと認識し、現実を精一杯生きぬくことができるのだろう。多くの人々は、このよるな問題は宗教家だけが考える問題だとして、自分達は、あわただしく生き、あわただしく死んでいくのがあたり前のように考えている。しかし、われわれも生死の問題を考え、それを超越する為の努力をせねばならない。私達は今の世を生きているが、過去には無数の人が生きてきたし、これから先も同じように生きていく人が続く。

釈尊は過去に亡くなった人であるが、生死輪廻を切り、悟られた人である。そして日蓮聖人は、その仏の教えを受け従われた。我々も出離生死を願うのであれば、先師の教に従い、いつ臨終をむかえても動揺しない覚悟を持ちたい

日蓮聖人の臨終観（奥野）

日蓮聖人の臨終観（奥野）

ものである。

聖人の御書を拝読するに、聖人は名譽や地位、財産という諸々の欲望には関心を示さぬ方であった。現代の我々は聖人が誠しめている事に反し、欲望の虜となっている。聖人の時代と現代とは時代がちがうが、その本質に変わりはない。時代はいろいろである。静かにすごせる時代もあれば、戦乱の世もある。それぞれの時代なりの生き方、死に方の考えがある。現代はめまぐるしく移り変わる世の中である。考えられなかったような事が次々と実現されていき、コンピュータなるものの働きによって複雑な問題が処理されていく。人間が地球以外の地へ移り住むことも考えられる時代なのである。そのような科学の発達によって、人の寿命も延びては来ているが、どのような者も死なぬというのではない。私達は、僧籍にある関係上、多くの人のこの世との別れに立ち合うが、自分自身の死については、なかなか考えようとはしない。だが僧侶といえども次から次へと亡くなっていく。はたしてどれだけの人が、臨終の覚悟のもとに、いさぎよく無為の世界へと旅立てるのであろう。聖人の御生涯の大半は、生死の問題を解決せんとするものであった。聖人の臨終観の角度は種々であるが、至りつく所は一つである。それを一大事の観心の法門として説かれた。そしてその筋道は、生死輪廻を断ち、諸経中の功德が集約されている題目によって臨終正念しようとするものである。臨終正念とは、いかに安楽に死ぬかではなく、いかにこの生きている世界を充実させて生涯をおくるかなのである。即ち、生きている時に、臨終のことをよくよく認識し、成仏（悟る）しようとするのである。

一、謗法と臨終

日蓮聖人の生きられた鎌倉時代は、立正安国論にもある如く、当時、その世界を穢土とよび、住みやすい世ではな

かった。そこでそのような世の中を離れ、浄土という未だ見ない世界へ行って生活したいという願望があった。生きているうちに駆けぬなら、死んだ後に生まれかわっても行きたいという願望である。そこでみな念仏を唱えた。念仏すれば極楽往生できるといふ教えが、法然、親鸞によって流布されていたからである。聖人も幼少の頃、念仏を唱えていたようであるが、成長するにつれ、念仏では極楽往生できぬのではという考え方になって来た。当時は、臨終の時の相を重視する傾向があったが、念仏を唱えている者の臨終の様子がおかしかった。どうして安穩に死んでいけぬのだろう、相が悪かったり、苦しんだり、気が狂ったり、という死に方であった。極楽往生する時は、生きている時よりも色が白くなるはずであるのに、狂乱往生、異相往生を見せられた聖人は、そのことに疑問をもたれ、各地へと遊学されるのである。その結果、法華経でなければこの世は救われぬという結論に達し、布教の決意をもたれるのであった。

法華経を流布する為の当面の問題は、誰もが信じている誤った信仰、即ち弥陀信仰を強く批難することであった。大衆が智者と思ひ、厚く敬っている者の事を、

「或は世間に智者と思はれたる人人、外には智者氣にて内には仏教を弁へざるが故に、念仏と法華経とは只一也。南無阿弥陀仏と唱へれば法華経を一部よむにて侍るなど申しあへり。」⁽¹⁾

と述べ、智者のように思えるが智者ではない誤った考え方の者であることをいわれた。近來の念仏者や有智の明匠とおもわれる人の、臨終が思うようにならぬのは、法華経を行ずる者をあざむき、又行ずる者をして、念仏を申す心を生ずるといふ法華経誹謗の大謗法によるのだといわれるのである。⁽²⁾ 題目弥陀名号勝劣事の中で聖人が、

「法華経こそ此穢土より浄土に生ずる正因にて侍れ」

といわれているように、穢土という現実世界から、後世を浄土に生まれるには、法華経がたよりになるといふことである。現代では、後世などというところ、何か現実で解決のつかぬ問題の逃避先のように考えられるが、当時真剣に道を求めた者たちには、人間死ぬとどうなるかを考える事は、重要なことであつた。

死んだら骨となるだけと考えれば、現実さえ楽しければという考えにもなりかねないが、生命というものはどこまでも続き、自分が生きていることが、過去があつての現在であり、又未来をも予約しているというならば、今現在をハッキリと生きることが、過去、未来の自分を生かすものであり、真剣に生きざるを得ないだろう。日蓮聖人の真剣な生き方は、過去の謗法の罪を消すとともに、未来に仏の世界に生まれんが為の生き方であつた。

我々は、臨終はすべての終りと考えがちだが、臨終の時点において、次の世界の始まりがあり、臨終の良し悪しを考へることは、過去、現在、未来を知ることにも通じてるのである。聖人が、「謗法の為臨終がよくない、法華経に依らねば臨終はよくならない」といわれるのは、過去の罪を法華経によって消し、現実の生活を法華経によって充実したものとし、未来をも法華経によって保証されたものにせんが為であつた。当時、後世の始まりである臨終が重んじられたのは当然であり、現実の修行、生活如何んによって臨終が決ってくるのであれば、命をかけても強く謗法を責め、法華経流布に力をいれられたのである。

日蓮聖人が何なるものが謗法で、何が真実正統な教であるかと考えられた論拠は、「経文という明鏡に照らす」といふことであつた。聖人は、現実を経文に照らすことによつて、事実であるか否かを実証することが合理的論証のだと考へられた。その上、聖人の論証は信をもつてのものである為、一般的学問智識以上のものだと考へ方であつた。「経文という明鏡」といわれるときの経文とは、了義経であり、一切経中最勝の法華経である。このような考へ

方が述べられるのは、次の報恩抄中において

「我れ八宗、十宗に随はじ。天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかながへしがごとく、一切經を開きみるに、涅槃經と申經に云、依レ法不レ依レ人等云云。依法と申は一切經、不依人と申は仏を除き奉て外の普賢菩薩、文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸人師なり、此經に又云、依レ了義經不レ依レ不了義經等云云。此經に指ところ了義經と申は法華經、不了義經と申は華嚴經、大日經涅槃經等の已今当の一切經なり。されば仏の遺言を信するならば、専ら法華經を明鏡として一切經の心をばしるべきか。随て法華經の文を開き奉れば、此法華經於レ諸經中一最在レ其上等云云。」(定遺一一九四)

といわれるように、聖人の仏道修行における筋道を示されている。又、「法華經を明鏡として一切經の心を知る」ということは、一切經の心は法華經という領解に他ならない。即ち、法華經に照らし出されてはじめて諸經の中の心を知ること、法華經の中に諸經の心が含まれているということだ。それまで、念仏こそ後世を約束するものかのように思われていた世の中に、法華經を普段から信するか否かが臨終における重大な問題である事を広められていた。守護国家論において、

「是故信^ニ法華經^一者設臨終時、心不^レ念^レ仏口不^レ誦^レ經不^レ入^ニ道場^一無^レ心照^ニ法界^一無^レ音誦^ニ一切經^一不^レ取^ニ卷軸^一拳^ニ法華經八卷^一徳有^レ之。」(定遺一一一)

といわれる。法華經を信する徳というものをあまりにも強く述べられているようにもとれるが、聖人は命をかけて法華經を信じられ、色読され、流布せんとされたのである。であればこそ、法華經流布の前に立ちはだかる大謗法の諸宗を、あれほどまでに批難されたと思える。

「諸経は無得道墮地獄の根源、法華経独り成仏の法也と、音も惜まずよばはり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽せよ。」

と述べられているし、そのことを信じられない者には、

「謗法不信の者は即断一切世間仏種として仏に成るべき種子を断絶する」

といわれる。謗法の者が臨終悪く、墮獄だということは、聖人の御書中の随所にみられるが、次の妙法比丘尼御返事もその一つである。

「謗法と申罪をば、我もしらず、人も失とも思はず。但仏法をならへば貴しとのみ思て候程に、此人も又此人にしたがふ弟子檀那等も、無間地獄に墮る事あり。所謂勝意比丘、苦岸比丘など申せし僧は二百五十戒をかたく持ち三千の威儀を一もかけずありし人なれども、無間大城に墮て出る期見えず。又彼比丘に近づきて弟子となり檀那となる人々、存の外に大地微塵の数よりも多く地獄に墮て、師とともに苦を受しぞかし。此人後世のために衆善を修せしより外は又心なかりしかども、かかる不祥にあひて候しぞかし。かかる事を見候しゆへに、あらあら経論を勘へ候へば、日本国の当世こそ其に似て候へ。代末になり候へば、世間のまつり事のあらき（粗）につけても世の中あやうかるべき上、此日本国は他国にもにず、仏法弘まりて国をさまらべきかと思て候へば、中々仏法弘り世もいたく衰へ、人も多く悪道に墮べしと見へて候。其故は日本国は月氏漢土よりも堂塔等の多き中に大体は阿弥陀堂なり。其上、家ごとに阿弥陀仏を木像に造り画像に書き、人毎に六万八万等の念仏を申。又他方を抛て西方を願。愚者の眼にも貴しと見候上、一切の智人も皆いみじき事なりとほめさせ給。」（昭定一五五四〜五）

といわれている。現代でも、宗教はなんでもよい、ただその信仰の仕方が真剣か否かが問題であるというふうにい

れる人がいるが、そこに謗法がある。勝意比丘等が二百五十戒を持って無間大城に落ちたと書かれているように、当時偉いと思われていた念仏宗の長老たる人たちのことも次のように述べられる。

「善慧、隆観、聖光、薩生、南無、真光等皆受_レ惡瘡等重病_一、臨終_ニ狂乱_ニ死之由聞_レ之_一、又知_レ之_一。其已下念仏者臨終_ニ狂乱_ニ不_レ知_レ其數_一。」

又、文永十一年上野殿にあてた手紙には、

「念仏宗と申は亡国の惡法也。このいくさには、大体人々の自害をし候はんずる也、善導と申愚癡の法師がひろめはじめて自害をして候ゆへに、念仏をよくよく申せば自害_レ心出来し候ぞ」(昭定八三七)

と示されている。

多くの者が師と仰ぎ尊敬している者たちが、臨終悪く、狂乱往生を遂げたことをハッキリ示され、その弟子檀那にも無間地獄に墮す罪を警告されている。これらの師と仰がれている者たちは、たとえ二百五十戒を持ち信仰厚く思われても、法華經を信じ持つという筋道からはずれているから謗法の罪により墮獄が必定なのである。妙法比丘尼に宛てられた御返事には、日本國に阿弥陀堂が多く、弥陀信仰が強いことを述べられているのだが、弥陀以外の真言、禪と同じである。聖人は厳格な態度で他宗を批難されるが、その厳しさは、聖人の弟子たちにも及ぶものであった。

「我弟子等之中信_ニ心薄淡者_一、臨終之時可_レ現_ニ阿鼻獄之相_一。其時不_レ可_レ恨_レ我_一等云云。」
と述べられ、謗法を強く誡め、臨終がよく、成仏する為には、法華經に依ることを言われるのである。妙一女御返事には、

「即身成仏と申す法門は、世に流布の学者は皆一大事とたしなみ用す事にて候ぞ、中就く、予が門弟は万事をさし

日蓮聖人の臨終観（奥野）

をきて此一事に心を留む可きや。建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間、在々処々にして申し宜べたる法門繁多なりといへども、所詮は只一途也」（昭定一七七七）

とあり、聖人が二十七年もの間、いいつづけられたことは、即身成仏、即ち臨終正念のことであった。

二、聖人の臨終について

当時、謗法である念仏がはびこっていた為、その信仰をやめさせ、この経こそ末法の世に必要なとされた法華経をひろめんとして、後世を重くみる当時の世相に照らし臨終観を述べられたわけだが、聖人自身は、ご自分の臨終をどのように考えられていたのだろうか。弘安元年七月、妙法尼に送られたご返事に、

「夫以^レば日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく、人の寿命は無常也。出る気は入る気を待^レ事なし。風の前の露、尚譬にあらず。かしこきも、はかなきも、老^レたるも若きも定め無き習^レ也。されば先臨終の事を習^レて後に他事を習^レべし……」（昭定一五三五）

といわれているように、人の死については幼少の頃より考えられ、ご自身も例外ではなく、生まれた以上、いづれの日にか臨終をむかえる覚悟は出来ていた。命を大切に考えておられるが、その命の使い方、真に有意義なものにしようとする為、命がけの信仰を持たれている。「臨終のことを習ふ」ことは、上人の生涯において重大な問題であり如何に生き、如何に死ぬかという生死の務題でもあった。それは自分自身の為でもあり、父母の為、弟子檀那の為、又一切衆生の為でもあったろう。

人間として生まれた以上、生・老・病・死の苦しみにつきまといわれ、それから離脱する事が仏教徒の願いであるよ

うに、聖人にとつても大事なことであった。聖人が生命について語られている遺文を見ると、

「命はかぎりある事なり」⁽⁷⁾

「とても此身は徒に山野の土と成るべし。惜みても何かせん。惜むとも惜みとぐべからず。人久しといへども百年には過ず。其間の事は但一睡の夢ぞかし。」⁽⁸⁾

とあり、又妙密上人御消息には、

「上大聖より下蚊虻に至るまで命を財とせざるはなし」

と述べ、命ほど大切なものはないが、この命にも限りがあり、毎年毎年一年ずつ年を重ねていることを知っていないながら、自分の命についてはいつまでも続くような考えを我々凡夫は持っている。

「臨終己に今にありとは知ながら、我慢偏執名聞利益に著して妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にかひなし」⁽⁹⁾

「今度生死のきづなを切らず三界の籠樊を出ざらん事かなしかるべし、かなしかるべし。爰に或智人來示云、汝が所歎、実に爾なり。如レ此無常のことはりを思知り、善心を発す者は鱗角よりも希也」⁽¹⁰⁾

日蓮聖人の目にうつった世相は、右の遺文に示されるようなものであったが、当時と比較し、現代も根本は変わっていないのである。尚一層悪くなり、欲に対する執著度は増すばかりである。大衆には大衆の楽しみがあり、世俗的な出来事に対し、悲喜いりまじった生涯があるのだから、聖人の考えられる楽しみは次の如きものである。

「未来永々の楽しみはかつかつ心を養ふとも、しゐてあながちに電光朝露の名利をば貧るべからず。三界無安猶如火宅は如來の教へ、所以諸法如幻如化は菩薩の詞也。寂光の都ならずは、何も皆苦なるべし。本覺の栖を離て何事か楽しみなるべき。願は現世安穩後生善処の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞名利の弄引なるべけれ。須く心を一つ

日蓮聖人の臨終観（奥野）

にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勧めんのみこそ、今生人界の思出なるべき。」⁽¹¹⁾

今生を生きたんたという証、それが眞の生きがいにつながっているのである。人身を受け法華經にめぐりあつてこの千載一遇の機会をのがし、いづれの日に再びこの同じ条件を得ることが出来ようか。日蓮聖人は、釈尊のように生きようとされた、我々も、釈尊や日蓮聖人を見習うべき立場にありながら、死ぬまで、その決断をつけられずに、生死輪廻を繰りかえずのである。聖人は、生死解脱の道を歩むにあたり、

「さて何なる法を持てか離^レ生死^ヲ速に成^ル仏耶^ト」⁽¹²⁾
と考えられた結果、

「我大師は変易、猶をわたり給へり。況や分段の生死をや。元品の無明の根本、猶をかたぶけ給へり。況んや見思枝葉の麤惑をや。此の仏陀は、三十成道より八十御入滅にいたるまで、五十年が間、一代の聖教を説き給へり。一字一句皆真言なり。一文一偈、妄語にあらず」⁽¹³⁾

と語られている如く、釈尊に従い、その教えによって生死解脱がなし遂げられると考えられた。聖人がたどられた苦行忍難の荆の道は、法華經を末法濁世に流布する者は並ならぬ命がけの努力が必要という釈尊の教えがあればこそ、
あえてその道を厭はず進まれたのである。

「今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。既に二十余年が間此法門を申に、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに我身命に及^ル」⁽¹⁴⁾

聖人の諸難中、佐渡の流罪は寒苦にも責められ、厳しく命にも及ぶものであったが、にもかかわらず、

「日蓮が流罪^レ今生、小苦なればなげかしからず。後生には大楽をうくべければ大に悦^レし」とまで考えられている。聖人は、竜口の頭の坐頃より、臨終の覚悟は連続的にあり、後生にはの言葉となつて出て来ているのだらう。佐渡御勘気鈔の中に、

「必ず身命をすつるほどの事ありてこそ、仏にはなり候らめと、をしはからる。」（昭定五一〇）
と示されるが、我々凡夫のように死ぬ迄臨終の覚悟を持たぬ者とちがい、積極的に、いつもいつも臨終の覚悟のもとに、事にあたられるのである。

「身命に過ぎたる惜き者のなければ、是を布施として仏法を習へば必仏となる」⁽¹⁶⁾
ということであるが、

「世間の浅事には身命を失へども、大事の仏法などには捨る事難し。故に仏になる人もなかるべし」⁽¹⁷⁾
と説明されるのである。聖人ご自身も、

「日蓮過去に妻子所領眷属等の故に身命を捨し所いくそばくかありけむ。或は山にすて、海にすて、或は河、或はいそ等、路のほとりか。」⁽¹⁸⁾

といわれているように、前世にては、凡人と何ら変わるところがなかった、がしかし、今度の自身の生命は、是が非でも価値あるものにしたかったのである。

「然れども法華経のゆへ、題目の難にあらざれば、捨し身も蒙る難等も成仏のためならず」⁽¹⁹⁾
即ち、最高の生きがい||成仏の為に生命をかけるということだ。

釈尊ご在世の時と、聖人の時代とは、修行の精神は同じであっても、外にあらわれる形はちがっていたし、現代

の我々とも異なるのである。「必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏にはなり候らめ」といわれても、流罪の身になるようなことは今の我々にはありえないが、死刑を宣告された尾崎秀実のような者には、その心がわかつていたかも知れない。

「経に云、有諸無智人悪口罵詈等、加刀杖瓦石等云云。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華経につけて諸人に悪口罵詈せられ、刀杖等を加る者ある。日蓮なくば此一偈の未来記妄語となりぬ」（昭定五五九）

「父母の頸を刎、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも『智者に我義やぶられずば用じ』となり。』其他の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず」（昭定六〇一）

いづれも開目抄の中のお言葉である。何とすさまじく生きられた方なのだろう。しかし大変なご自覚を持たれていた聖人にも、寄せる年波と、四年にわたる佐渡流罪生活、並びに身延の寒さがこたえられたのか、自然と健康を害われていかれた。身延へはいられる迄の聖人は、迫害やら生命がけの折伏等、緊張の連続であった。身延入山後、その緊張が少しはほぐれ、同じく厳しい山中での生活ではあるが、幾分余裕が見られるようになった。信者方との文通も多くなるし、弟子の育成にもつとめられた。だが建治三年、五十六才の歳末頃より、下痢を患らわれるのである。

「日蓮下痢去年十二月卅日事起、今年六月三日、四日、日々に度をまして月々倍増す。定業かと存処云々に貴辺の良薬を服してより已来、日々月々減じて今百分の一となれり。」

身延へは、ご自分から隠棲されたわけであるが、齢五十を越えた聖人にはその寒苦がこたえられた。弘安元年六月の四条金吾殿への御消息、同月池上兵衛志への御消息、並びに十月の金吾殿への御手紙、十一月の兵衛志への御手紙

から、建治三年の暮より、翌年中下痢に苦しめられたことが伺われる。それ程まで永い期間、ご病氣が続いたことは、その原因も種々考えられるが、とりわけ身延の寒さが影響していたと思われる。

「ふゆと申ふゆ、いづれのふゆかさむからざる。なつと申なつ、又いづれのなつかあつからざる。ただし今年は余国はいかんが候らめ、このはきむは法にすぎてかんじ候。ふるきをきなどもにとひ候へば、八十・九十・一百になる者の物語候は、すべていにしへこれほどさむき事候はず。此あんじちより四方の山の外、十丁二十丁人かよう事候はねばしり候はず。きんべん一丁二丁のほどは、ゆき一丈、二丈、五尺等なり。このうるう十月卅日、ゆきすこしふりて候しが、やがてきへ候ぬ。この月の十一日たつの時より十四日まで大雪下て候しに、両三日へだててすこし雨ふりて、ゆきかたくなる事金剛のごとし。いまにきゆる事なし。ひるもよるもさむくつめたく候事、法にすぎ候。さけはこをりて石のごとし。あぶらは金ににたり。なべ、かまに小水あればこをりてわれ、かんいよいよかさなり候へば、きものうすく食ともしくして、さしいづるものもなし。坊ははんさくにて、かぜゆきたまらず。しきものはなし、木はさしいづるものもなければ火もたかず。ふるきあかづきなんどして候こそで一なんどきたるものは、其身の色紅蓮大紅蓮のごとし。こへははゝ(波々)大ばば地獄にことならず。手足かんじてきれさけ、人死ことかぎりなし。俗のひげをみれば、やうらくをかけたたり。僧のはなをみれば、すずをつらぬきかけて候。」

永い引用文になったが、この書から察するにお身体にかなり障ったことであろう。現在の身延山も寒さが厳しいが、季候は当時の方が寒かったろうし、住居、衣類の事を考え合わせると、その寒さははかり知れぬものがある。

このような環境の中、聖人のお身体の不調は、大事にいたったり、小康を保ったりを繰り返しながら続いたのであった。「さては去文永十一年六月十七日この山に入候て今年十二月八日にいたるまで、此山出事一步も候はず。ただし八

年が間やせやまいと申、とし（齡）と申、としどしに身ゆわく、心をばれ（毫）候つるほどに、今年は春よりこのやまいをこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々にをとろへ、夜々にまさり候つるが、この十余日はすでに食もほとをど（殆）とどまりて候上、ゆき（雪）はかさなり、かん（寒）はせめ候。身のひゆる事石のごとし。胸のつめたき事水のごとし。」

この書は、上野殿母御前に宛てられたものだが、食もほとんど通らぬ程、体力も消耗され、やせられていた。この書の最後に、「これもよもひさしくもこのよに候はじ。一定五郎殿にゆきあいぬとをばへ候。母よりさきにけさん（見参）し候わば、母のなげき申つたへ候はん。」とあり、ご自身の臨終を覚悟されるのである。又、弘安五年九月十九日に、波木井殿に宛てられた書状では、具体的に、ご自身の墓の事まで述べられている。

「さてはやがてかへりまいり候はんずる道にて候へども、所らう（勞）のみ（身）にて候へば、不ぢやう（定）なる事も候はんずらん。さりながらも日本国にそこばくもてあつかうて候みを、九年まで御きえ候ぬる御心ざし申ばかりなく候へば、いづくにて死候とも、はか（墓）をばみのぶさわ（沢）にせさせ候べく候。」

このように一歩一歩せまり来るご自身の臨終を考えられる時、はたしてどのような臨終であるかが問題であった。身命はすでに、法華経にゆだねられたのであるから、今さら改まって臨終におそれおののくことはないにしろ、聖人の臨終の相如何んによっては、弟子檀那等の信仰心がぐらつくおそれがあった。どうしても臨終の相が良く、聖人の後に続く者たちを、より一層強い法華経の信行者に育ててはならないと考えられる時、自身の臨終は、重大な意味をもってくるのである。

「日蓮はわるき者にて候へども、法華経はいかにかおろかにおはすべき。ふくろはきたなければどもつつめる金はき

よし。池はきたなければちすはしゃうじゃう（清淨）也。日蓮は日本第一のえせ（僻）もの也。法華経は一切経にすぐれ給へる経也。心あらん人金をとらんとおぼさば、ふくろをすつる事なかれ。蓮をあい（愛）せば池をにくむ事なかれ。わるくて仏になりたらば、法華経の力あらはるべし。よって臨終わるくば法華経の名をりなん。さるにては日蓮はわるくててもわるかるべし。恐々謹言」（昭定一九〇二〜三）

西山殿御家尼御前にあてたお手紙であるが、ご自身の事を日本第一のえせもの、日蓮はわるき者というように、強く謙遜されている。先に、日蓮は日本第一の法華経の行者、日蓮ほど身命をかけて信仰の道を歩んだ者はいないといわれた御書にくらべると、言わんとするところが大きく異なるようにも思われるが、当時、聖人は念仏者等からは悪人以上の者にみられていたわけであり、その臨終の相は、他宗の者にも関心の的であった。そのような聖人の、臨終の相が良ければどうであろう。法華経を信じ持たれたことの功力がはっきりすることになるのである。さすれば、お弟子たちばかりでなく、日本國中の者、後々の世の者たちにも強い影響を及ぼすことになり、ここは一つ、どうしてもご自身の臨終が良くならねばならなかった。

普通の人であるならば、他に与える影響とかを考ふる余裕などなく、死にたくない、死ぬとしても苦しみたくなないと、自分自身の事をのみ考ふるのであるが、聖人の心がまえはちがったのである。聖人の一生を振りかえれば、利己の為の探求など少しもなく、少欲知足の求道生活であった。聖人滅後七〇〇年、宗門は巨大化し、弟子門下と呼ばれる者、題目を唱へる信徒の数は、数え切れぬ程になって来ているが、聖人の教えに沿って仏道を精進する者の数は一体どれくらいなのであろう。我々も良き臨終をむかえられるよう勇氣をもって信行に励みたいものである。それこそが、聖人に対するまことの報恩ではなからうか。

〔註〕

- (1) 昭定二九四 題目弥陀名号勝劣事
- (2) 二九六 題目弥陀名号勝劣事取意
- (3) 七三六 如説修行鈔
- (4) 五二三 生死一大事血脉鈔
- (5) 三二三 当世念仏者無間地獄事
- (6) 八四二 願立正意抄
- (7) 一九一二 法華証明鈔
- (8) 一二七一 松野殿御返事
- (9) 二八三 持法華問答鈔
- (10) 三五二 聖愚問答鈔上
- (11) 二八五 持妙法華問答鈔
- (12) 三五五 聖愚問答鈔上
- (13) 五三八 開目抄
- (14) 五五七 開目抄
- (15) 六〇九 開目抄
- (16) 六一二 佐渡御書
- (17) 六一二 佐渡御書
- (18) 五〇四 四条金吾殿御消息
- (19) 五〇四 四条金吾殿御消息
- (20) 一五二四 中務左衛門殿御返事
- (21) 一六〇五 六兵衛志殿御返事
- (22) 一八九七 上野殿母尼御前御返事
- (23) 一九二四 波木井殿御報